

「優れた教員養成機関をどうサポートするか」

2013.3.20.

仙台白百合女子大学教授

牛渡 淳

1. 全体の基本的理念と構想について

- ・第二次大戦後の我が国の教員養成の特質である「開放制」（多様性）を前提としたうえで、それらの質保証を主体的に行おうとする理念に賛同。実態を踏まえた理想の追求。

2. 基準について

- ・基準に照らして画一的に判断するのではなく、教員養成教育の多様性に配慮する姿勢は評価できる。
- ・全体的にバランスよく必要な項目を盛り込んでおり、妥当な基準内容である。
- ・特に、大学の特色を踏まえた視点や項目が盛り込まれており画期的である。例えば、「教養教育」の充実を求めている点（基準4-1の観点「幅広い教養教育をベースとした、専門性の高いカリキュラムを提供していること」）や、「学生の研究」を求めている点（基準4-2の観点「学生の研究志向を育むカリキュラムを提供していること」）
←「即戦力」「実践的指導力」だけではなく、「大学でしかできない力量」の育成に配慮している。

3. 試案の問題点と課題（1）「評価疲れ」の実態にどう対応するか

すでに、他に多くの評価制度が存在し（例えば、大学評価、文科省の課程認定等）、評価という文化は我が国にかなり浸透してきたが、他方、特にこれらの評価と重複してしまった場合などは、非常に大きな過重負担になる可能性。すでに、「評価疲れ」の実態も。
→今回の新たな評価制度の導入に対する警戒感が生じたり、参加大学数を減らす可能性。

◎対応策を検討する必要性あり：

①このア krediyteeshonによる大学の作業負担をどう軽減するかという課題

→基準項目数、報告書の分量のスリム化等、実際の評価プロセスの簡略化が必要

・大学基準協会の例

②他の評価との統合という課題：（例）将来的に文科省の課程認定との統合（代替機能を担うこと）は可能か。試案では、「課程認定行政からの独立」をうたっているが、独立して行われたア krediyteeshonが、結果的に、課程認定行政の代替えとして認めてもらえれば、戦略的にこのア krediyteeshonを広めるために非常に有効。

4. 試案の問題点と課題（2）ステークホルダーとの関係をどう作るか

ステークホルダーとの関係については、試案で述べられているように、社会的通用性を高めるためにも、パターンAの方がパターンBよりも望ましい。しかし、パターンAを採用するには高いハードルがある。その理由の一つは、ステークホルダーの団体それぞれが他の特定の団体と組織的連携を作ることの難しさ、第二に、関係する専門職の質保証のために様々な団体が自主的に、かつ、共同でかかわるという伝統が、我が国ではまだ弱いこと、第三は、ステークホルダーが、財政面での負担を負う責任を持つ可能性があること（試案では、コンソーシアム構成組織は「責任（財政面での協力も含む）も共有すること」となっている）。

例：全連小等の全国的な校長会組織：全国の都道府県単位校長会の連合体→他の団体と特定の関係を作ることの難しさ←参加を可能にするための戦略が必要

学会：組織としての連携は可能（学会の社会貢献の一環として）。ただし、学会は、会員よる会費収入に依存しているため財政的な余裕はなく、「協力会員」が財政負担があるかどうかは試案では不明だが、あった場合、）財政的負担は難しい。

⇒提案：①パターンAでスタートするが、その場合、財政負担は、教師教育組織・大学団体（正会員）のみとし、ステークホルダー（協力会員）の財政負担が無いことを明確にすること。さらに、ステークホルダーにとって、これに組織として参加することが、どのようなメリットになるか（ステークホルダーにとっての魅力）を、より明確にし、訴える必要性あり。あるいは、②当面は、パターンBでスタートさせ、活動が一定の広がりを見せた時に、パターンAに移行することも現実的な案。

4. 教員養成の高度化に伴う新しい免許制度に対応するために

・今回のアクレディテーションは、主として学部レベルの教員養成機関を対象としているが、今後の教員養成・免許制度改革においては、大学院における教員養成の充実が課題となる。そのため、教職大学院以外の、専修免許状に対応する大学院での教員養成の充実がめざされる。

→今後、学部、大学院、教職大学院、の三者の認証評価が必要となろう。その場合、同じ教員養成の認証評価が相互に関連性をもたないで行われることは弊害が多いと考えられる。

→そこで、今回のアクレディテーションの事務を担う事務局（コーディネート組織）は、試案の第一案に示されたように、現在教職大学院の認証評価を実施している「教員養成評価機構」とし、将来的には、我が国の教員養成を担う三つの部門、教職大学院、学部、大学院、それぞれの認証評価を一体的に運用することが望ましい。